「本講」から「第２１講」まで、「動詞」と「形容詞」の実際の運用について学習します

第１５講　「名形副」系と「他動詞」の様々な「目的役」類

名詞系のまとめ

名詞系 ①「主目補」になる ②「成句詞」の「後属役」になる	名語
	名句
	代名詞
	不定詞の名詞的用法（wh句を含む）
	能動分詞（*現在分詞*）の名詞的用法（*動名詞*）
	名節（ｔｈａｔ節、ｉｆ節、ｗｈｅｔｈｅｒ節、wh節）
	▲*複合関係代名詞*による名節
	▲*複合関係形容詞*による名節

▲印は、本書ではまだ学習しておりません（別巻で学習する予定です）

形容詞系のまとめ

形容詞系 ①「名詞修飾」する（役外装飾族） ②「補役」になる	形容語
	形容句
	不定詞の形容詞的用法
	能動分詞（*現在分詞*）の形容詞的用法
	受動分詞（*過去分詞*）の形容詞的用法
	完了分詞（*過去分詞*）の形容詞的用法
	形容節（*関係代名詞節・関係副詞節*）注意

注意　「形容節」は「補役」にはなれません（「先行詞」名詞修飾のみです）

副詞系のまとめ

副詞系 「場面状況」の設定（役外状況族）	副語
	副句
	不定詞の副詞的用法
	能動分詞（*現在分詞*）の副詞的用法（準副節・*分詞構文*）
	受動分詞（*過去分詞*）の副詞的用法（準副節・*分詞構文*）
	完了分詞（*過去分詞*）は主に、「ｈａｖｉｎｇ」で全体が「副詞化」する
	副節
	▲*複合関係代名詞*による副節
	▲*複合関係形容詞*による副節
	▲*複合関係副詞*による副節

▲印は、本書ではまだ学習しておりません（別巻で学習する予定です）

これまでの学習で、**『文。』は、「名詞」「形容詞」が、「自動詞」か「他動詞」に支配されて主題があらわされ、「副詞」によってその場の「場面状況」が設定されているもの**だということがわかったと思います

ただ、単純に「名詞」「形容詞」「副詞」といっても、いろいろありました

ここで、様々な「名詞」「形容詞」「副詞」を、それぞれ**「名詞系」「形容詞系」「副詞系」という大きな視点で総括**し、上記のような表にまとめてみました

各、「名詞系」「形容詞系」「副詞系」を使いこなせるようにしてください

ここで、大事な視点は、「不定詞」だ「分詞」だと微細にテクニカルに分断して学習したり考えたりしてしまうのでなく、**『文。』中での役割（「文役」「主目補」）や、「名詞」なのか・「形容詞」なのか・「副詞」なのかを見極めつつ、どういう形態（「語」「句」「節」「不定詞」「分詞」）で表現されているのか**を大きな視野で認識することです

例えば、場面状況として「目的」をあらわしたい場合

「句」→「ｉｎ　ｏｒｄｅｒ　ｔｏ　ｐｌａｙ　ｔｅｎｎｉｓ」

「節」→「ｓｏ　ｔｈａｔ　ｈｅ　ｃａｎ　ｐｌａｙ　ｔｅｎｎｉｓ」

「不定詞」→「ｔｏ　ｐｌａｙ　ｔｅｎｎｉｓ」

となるのです

この違いは、作文者の選択の問題です

もうひとつ注意点があります

「他動詞」の扱いです

「他動詞」の「目的役」類となる「名詞系」の整理整頓はタイヘンです

個々の「他動詞」によって、「名詞系」のうち、どの「名詞」が「目的役」として可能かどうかが慣用的に決まっているからです（個別の採否・可否の問題）

どんな「名詞系」でも「目的役」として可能というわけではないのです

例えば、「ｗａｎｔ　ｔｏ　ｄｏ」「ｋｎｏｗ　ｔｈａｔ節」は可能でも、「ｗａｎｔ　ｔｈａｔ節」「ｋｎｏｗ　ｔｏ　ｄｏ」は認められないのです

また、「ｅｎｊｏｙ」「ｓｔｏｐ」「ｆｉｎｉｓｈ」の「目的役」として「～ｉｎｇ」は認められますが、「ｔｏ　ｄｏ」は認められず、「ｅｎｊｏｙ」「ｓｔｏｐ」「ｆｉｎｉｓｈ」の後ろにある「ｔｏ　ｄｏ」は、「役外状況族」の「副詞的用法」と解釈せざるを得ないのです

これらは、論理必然というものではなく、使用者の慣用であり、個々の「他動詞」に個性を認め、逐一覚えていくしかありません（まさに、辞書の「用例」の活用！）

ここで、活躍するのが、「辞書」なのです
「辞書」が「『意味』を調べるものだ」と思っていたら、「負け」の始まりです
主に**「品詞」の確認**と、**「自動詞」「他動詞」「形容詞」等の「品詞の用法」を調べる**ためにあるのが、「辞書」なのです
例えば、まずは調べようとしている「他動詞」の「目的役」として何が可能か、すなわち「～ｉｎｇ」「ｔｏ　ｄｏ」等が「目的役」として使われるのかというように、「品詞の用法」を調べるのが辞書の使用法なのです
もちろん、「名詞」「副詞」の「用法」も重要ですが、まずは「自他形」の「用法」を調べ知ることが上達の近道だと思います
始めのうちは、「意味調べ」に拘泥するのも仕方がありませんが（あとあと考えると困ったもんです）、ある程度、「文法」の学習が進んできたら、**「品詞分解作業」における、「品詞確認」「用法確認」が中心**となってくるはずです
知らない単語を目にしても、たとえ「一文」であっても、その文の状況の範囲内で、「品詞と文役の推測」「用法の推測」とともに、「意味の推測」をしてから、「辞書」で、「品詞・文役確定」「用法確認」「意味確定」をしなければならないのです
殊に「品詞の推測」は重要で、ひとつの単語に「名形自他＋副」が混在しているのはまれではないので、上から全部なぞるのは徒労ですから、**「品詞」のあたりをつけて、「意味」を推測してから「意味」「用法」を確認**するのです

その後、「一文」と「一文」の「有機的関係」から、「文脈的」・「論理的」な「解釈」へと進んでいくのです

「辞書」の「使い方」

① **「品詞」「語句節」「文役（主目補）」「役外族」「後属役」をおおよそ理解し、それらの「（立体的）位置関係」がわかってきたら、「品詞分解作業」に集中し、「品詞確認確定」と「文役確定」のために使う**（「例文」熟読検討！）
②「自動詞」「他動詞」「形容詞」の「用法」を確認する（「例文」熟読検討！）
③「名詞」「副詞」の「用法」の確認をする（「例文」熟読検討！）
④**「わかならい単語」があっても、「位置関係」から「品詞」「文役」「後属役」「役外族」等を確認確定し、そこから、「意味」を「推測」してから、「辞書」の中からふさわしい意味を探し、確定する**（辞書に載っていないが、文脈に合う「適訳・名訳」を「国語辞典」「漢和辞典」を駆使して発見できるようになれれば一人前ですが、これが「語彙」の習得・蓄積・引き出しの課程です）

「意味」は、適宜、好きなときに拾ってくださいっていうことです（「意味より用法」）

次に、「他動詞」の「目的役類」について少し考えてみましょう

「他動詞」の「目的役類」の認識

「他動詞」の様々な「目的役」類とその採否（可否）という問題に関して、参考までに、「能動分詞の名詞的用法」と「不定詞の名詞的用法」のいづれかを「目的役」に用いることにより意味が異なる「動詞」の主なものを以下に示します

単　　語	能動分詞（過去的）	不定詞（未来的）
ｒｅｍｅｍｂｅｒ	～したことを覚えている	忘れずに～する
ｆｏｒｇｅｔ	～したことを忘れる	～するのを忘れる
ｒｅｇｒｅｔ	～したことを後悔する	残念ながら～する
ｔｒｙ	ためしに～してみる	～しようと努力する
ｇｅｔ	～し始める	～するようになる

個々の「他動詞」には個性があり、「目的役」として許される「名詞系」と許されない「名詞系」があるということを確実に理解して、「他動詞」に対峙してください

そして、これからは・・・「動詞」と言ったり、「一般動詞」や「ｂｅ動詞」と言うのも何の効用もありません
「自動詞」「他動詞」ときっちり分け、さらに「自動詞」は「自立動詞」「補完動詞」に確実に分類・認識し、「他動詞」は「関渉動詞」「授与動詞（第２０講参照）」「拡術動詞（第２１講参照）」と分類・認識しなければなりませんし、さらに、**個々の「他動詞」では、「目的役」としてどんな「名詞系」が可能なのかを習得**しなければならないのです（ここが辞書の活用・活躍の場です）
ここまでは一般的にある程度は行われていますが、さらなる分類が有効です

次からは、「動詞」や「形容詞」の実際の運用のされ方を細かくみていくのです
「さらなる分類」を提示していきます

次講では、「他動詞」の４番目の類型（「動詞」全体では６番目）をみていきましょう（次々講では、「形容語」について詳しく分類します）
「さらなる分類」の顕現です

「英語」の「学習・勉強」の「進め方」

① 基礎的」「論理的」な「英文法入門」レベルを徹底的に理解する（本書）
②「基礎的英文法問題（集）」一通りこなす
③④「入試レベル文法問題（集）」を徹底的にこなす
③④「基礎的英文読解問題（集）」（一問が数行・数文程度のもの）を一通りこなす
⑤「入試レベル長文読解問題（集）」を徹底的にこなす
⑥「過去問」をこなす

これは、ひとつの提案にすぎませんが、「英語を苦手とする方」には最適だと考え提示しました（１００年以上の旧来の「文法少々、読んで訳す」という悪弊はやめましょうよ）

なぜなら、スポーツと同じ「手法」だからです（その指導法が先進的だからです）「長文」を読みながら（初見の）「文法」を学んでいくという従来の「主流的」な「方法」では、多くの「英語を苦手とする人」は捨て去られてきました（いきなり「試合」ですか、毎日「試合」をしながら「ルール」を学んでいく方法が主流ってことですか）

この方法は、「英語が得意なお方が、英語が得意なお方に教える方法」で、「英語が苦手な衆には向かない方法」でしょう（英語の指導担当者も物理や化学を指導してみましょうよ）

スポーツだって、「天才的な元選手」が「才能のある選手」「将来のスター選手」を指導するだけではないでしょう

「努力家の元無名選手」「研究肌の元控え選手」等がよき指導者となり、「いまいち才能の無い選手」「苦手な選手」などいろいろな人を、その人にあったメニューで、「体力づくり」「筋トレ」「基礎的練習」「技術指導」「練習試合」等と段階を踏んで育てていく方法もあるはずでしょう（ある意味、「自己 MAX」到達を前提とした「人権問題」です）

高校英語や大学受験英語だって、スポーツや理系科目と同様に、「基礎理論」すなわち「基礎的文法事項」を理解して、「一文」を完全に読めるようにしてから、「細かい文法事項（詳細知識）」にかかり、「数文」の読解を経て、最後に「一文」の多数の集合体である「長文」に取り組むべきでしょう（ただ、本格的長文読解の前に、現代文読解を完成させておきたいものです）

いきなり「練習試合」すなわち「実践（長文読解）」の中で、大まかな文法事項を覚えて、「読んで訳」していくというのは、もう時代錯誤でしょう

「練習中に水を飲むのは根性がない」っていう昭和の常識を正常だと思いますか？

長文読解のなかで文法を学んでいく方法が、合っている方はそれで結構ですが、「英語を苦手とする人」をはじめとする多くの人々に、旧来的陋習的一方法を一律に強制されるべきものではないでしょう

「論理的」「合理的」な様々多数の「方法」の中から、「自分に合った方法」を自由に選択すべき権利が当然あるものと考えます

本書は、英文の構造の基礎的全体像を解析提示し、その論理体系の理解と品詞分解的読解と論理的思考が英語学習の主脈のひとつであることを提案しているのです

第１６講　「あとひき他動詞」と「固有必須の副詞」

「英語の苦手な人」って「英語も社会（科）のような棒暗記でやる気がしない」って思い込んでいたり、「英語嫌悪人間」は「暗記の嫌い」な「数学・物理の好きな理系」の人に多くて、「数学・物理は論理だからいいけど、英語・社会・古文はただの暗記科目でわけわんねぇ」って、決まって言いませんか（本書では、これを打開し、「英文法」の「論理科目化」「科学化（化学化）」の試行を断行しています）

そこで、「化学」と「現代文」に「漢文」なんですが、ここが、理系の人でも分かれるんですよね

そう、「中間的な科目」なんですね

論理性に満ちてはいますが暗記部分（論理不明部分）もあり、多少面倒だけど、その暗記部分を覚えてしまえば、あとは論理に乗っていける科目なんですよね

だから、意外と、理系の人に、「現代文・漢文が得意」っていう人がいて、「物理」好きの人に、「化学がめんどい、苦手」っていう人がいるんですね

「化学」は、論理的ではあっても現象を追いかけるというところから、どうしても暗記事項が増えてしまうんでしょうし、「現代文」「漢文」は「他人を説得する論理的な『文。』の集合体」ですから、文脈的論理性がかなり詰められているんですね

従来、教える側も、教わる側も、「英語・古文・漢文・社会は暗記科目」「数学・物理・化学は論理科目」っていう「暗黙の分断」があったのではないでしょうか（下手をすれば、「古文」は「情緒感傷鑑賞科目」っていうところがありますね）

本書の主眼は、その中間を考えましょうよということなんです

「英語」を出来る限り「論理的」「科学的」に捉えて、「化学」のような科目にしてしまいましょうよってことなんです（現象の羅列ではなく、論理的体系化です）

「現代文」はもとより、「漢文」も「古文」もこの方策で捉え、「化学」的にしてしまいましょうって考えているんです（実際、暗記の多寡はありますが、当然ながら「社会」も特に「地理」は論理科目なんですよ、社会科学の入り口ですからね）

余談はさておき、本講では、**「後続的他動詞」**、別名**「あとひき他動詞」**という、**「関渉文型」の特殊な場合**について見ながら、次の諸点について考えてみましょう

① 『文。』による「情報伝達」とは何なのかを、再考してみましょう
②「英語が苦手な人」に「熟語、熟語、熟語」って押し付けて、何の効果あるのでしょうか
③ 「品詞分解」「構造把握」「構造分析」で、「論理体系のない現象棒暗記撲滅運動！」
④「論理」で攻めれば、「おおよその分野では、ある程度、いや、全部なんとかなる」ということを垣間見ましょう

「後続的他動詞」「あとひき他動詞」とは

ここで、**「後続的他動詞」**、別名**「あとひき他動詞」**という「概念」「範疇」を考えていきます

まず、例文をあげます

Ｉ　ｐｌａｙ　ｔｅｎｎｉｓ　．
　　他　　目

「ｐｌａｙ」が「他動詞」ですので、「目的役」の「ｔｅｎｎｉｓ」は「必須」となります

ここまでは、いわゆる「５文型」といわれている、「自動詞」「他動詞」による「『文。』の支配」と「**構成要素提示責任**」や「**情報提示責任**」の問題なのです

では、**この他の「情報」**は「必須」なのでしょうか

例えば、次の例文の□の中には、**様々な「副詞系」による「情報」**を置くことができます

「時」「場所」「程度」「頻度」「目的」「手段」「理由」「譲歩」などです

□　Ｉ　□　ｐｌａｙ　ｔｅｎｎｉｓ　□　．

しかし、これらの**「副詞的情報」は、『文。』の構造の観点からは、本質的には「どうでもよい情報」（アクセサリー類似）で、「必須の情報」ではありません**

「副詞」による「情報」は、原則的には「どうでもよいもの」で、省略されやすいものでした

次の例文はどうでしょうか

①　Ｈｅ　ｉｎｔｅｒｅｓｔｅｄ　ｔｈｅｍ　ｉｎ　ｔｅｎｎｉｓ　．

「彼は、彼らに、興味を起こさせた。」で、「情報」が十分といえるでしょうか

読み手や聞き手は、「何に関して？」と先を「推測」して、待ち構えているでしょう

「Ｈｅ　ｉｎｔｅｒｅｓｔｅｄ　ｔｈｅｍ　．」で止めていいわけがありません

「ｉｎｔｅｒｅｓｔ」という「他動詞」を使った以上、「興味を起こさせたモノ」を、読み手や聞き手は要求し、作文者や発言者は「提示すべき責任」があるのです

このような「必須的情報」を、「ｉｎｔｅｒｅｓｔ」という「他動詞」の場合は、「ｉｎ　～」という「副句」であらわすのです（「構成要素」外の必須の情報というのは驚きですね）

このように、**「他動詞」の性質・種類によっては、「一個の目的役」以外の「情報」を意味的に「必須」とするものもある**のです

ひとつは、「授与動詞（第Ⅳ文型）」といわれ、「目的役」に「人目的」と「物目的」のふたつを「必須」とするものであり（第１８講参照）、もうひとつは、「第Ⅴ文型」といわれ、「目的役」の後ろにさらに「目的役を説明する補役」が「必須」となる「拡術動詞」です（「拡術動詞」という名称は本書によるもので、第１９講で詳述します）（ここまでは、「構成要素」として認められている情報です）

さらに、第３の類型（「他動詞」の第４の類型）として（あえていえば、「第６文型」となるでしょうか）、**特定の「副詞」を「必須」の「情報」とする「他動詞」があるのです（「構成要素」外の「副詞的情報」を必須とする驚きの「文型」です）**

ここでは、**「後続的他動詞」**、別名**「あとひき他動詞」**と命名しておきます

また、**「必須」の「情報」である「副詞」**を**「固有必須の副詞」**と命名します

次に、「あとひき他動詞」の別の例として、次に２つほどあげます

② He based his plan [on her idea] .
彼は、彼の計画を[彼女の発想の上に]基づかせた。（直訳）

③ They convinced her [of his success] .
彼らは、[彼の成功に関して、]彼女を納得させた。（直訳）

ここで、「[　　]」の情報がなくて実質的な伝達が成り立つでしょうか

「他動詞＋目的役」で「文法的」に成り立ってはいても、**「情報伝達責任」**は果たされてはいませんね

このように、**「情報伝達責任」の完遂のためには「固有必須の副詞」が不可欠な「他動詞」**もあるのです（**「後続的他動詞」、「あとひき他動詞」**）

では、①②③を「受動態」にしてみましょう

④ They were interested [in tennis] by him .

⑤ His plan was based [on her idea] by him .

⑥ She was convinced [of his success] by them .

④⑤⑥の「ｂｙ～」は、ある意味「どうでもよい情報」の「副句」です

それに対して、「固有必須の副詞（句）」はそのまま「固有必須の副詞（句）」です
「彼らは、興味をひきおこさせられた（直訳）」「彼らは、興味をもった（意訳）」だけで「情報」が十分とはいえません
受動態になっても、「何に」という「情報」が「必須」なのがわかりますね

≪**「自動詞」＋「受動分詞形容補語」＋「固有必須の副詞」**≫と「抽象化」できますが、その実体をどうとらえるかが重要なのです

これ全体を一体的に「熟語」ととらえるのか、**「元の『文。』」に遡れる単なる「受動態」に過ぎない**と認識するのかで、英語の学習に対する態度や展開が分かれるのです
「群集的一体的」なものとしてとらえて「丸暗記」となるのか、**「分析的」にとらえて「品詞分解」をし「元の『文。』」に遡る「構造把握」**となるのかと言えるでしょう

④　「ｂｅ　ｉｎｔｅｒｅｓｔｅｄ　ｉｎ～」
⑤　「ｂｅ　ｂａｓｅｄ　ｏｎ～」
⑥　「ｂｅ　ｃｏｎｖｉｎｃｅｄ　ｏｆ～」

これらそれぞれを「熟語」ですと言って覚えていけばいいのでしょうか
ただでさえ、**「受動態」というのは変則的事態なのですから、常に「原則・原型」に還らなければならない**のです
あくまで、**「原則・原型」があって、その「変形」なのだという「認識」が重要**なのです（原則・原因に遡れる認識力の有無や涵養が社会的に重要なのです・・・貢献力）
仮に、「原型」が使われることがなくなり、「変形」しか使われていないとしても、それは、「慣用」「現象」の問題であって、「文法」「論理」を学ぶ段階では、「原則・原型」とその「変形」という関係を意識しなければならないのです
ちなみに、

⑦　Ｔｈｅ　ｎｅｗｓ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ　ｈｉｍ.

⑧　Ｈｅ　ｗａｓ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ　ｂｙ　ｎｅｗｓ.

⑨　Ｈｅ　ｗａｓ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ　ａｔ　ｎｅｗｓ.

⑦には「固有必須の副詞（句）」は存在しませんので、「受動態」は⑧になり、「ｂｙ」が慣用的に⑨の「ａｔ」になっただけです
④⑤⑥と⑧⑨は根本的に違うのに、一括して「ｂｅ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ　ａｔ～」も「熟語」・・・なんて言っていいんでしょうか

「受動態の後ろに残るもの」

「受動態」の『文。』に接する場合、「注意すべきこと」があります

「受動態」とは、**実態体的には「他動詞」の「目的役」や「自動詞＋成句詞」の「後属役」を「主部」にして、見る立場を変え、「主客逆転させた描写」**です
文法論理的には、**「『文。』全体の受動分詞による受動転換的形容詞化」**です（第１５講参照）

その**転換の結果の文法的基本構造**は、
≪「受動分詞形容補役」＋「その他」≫です

今回の「注意すべきこと」とは、この「その他」に注目するということです
「その他」を「文法的に認識把握することができるか」ということです

厳密慎重に認識しないと、なんでもかんでも「副詞系」としてしまい、「フィーリング読み」「感覚訳」に陥ります

≪「その他」の種類≫

② **「純粋な副詞」**（「時」「場所」のような一般の「副詞」）
③ 授与文型」（第１８講参照）の**「元・人目的」**もしくは**「元・物目的」**
④ 拡術文型」（第１９講参照）の**「元・名補役」**や**「元・形補役」**
⑤ **「あとひき他動詞」の「固有必須の副句」**（本講）
をあげることができます（詳細は、第１９講の講末の「補足」を参照してください）

⑥ ④には特に注意をして、「その他」を認識し、確定させながら「英文」を「読解」するように努めてください

本講では、「あとひき他動詞」の認識と、その「能動態」の『文。』を「受動態」にした場合に、「固有必須の副詞句」を認識しているかということを学習してきたのです

次講では、「あとひき他動詞」に近似する存在である「あとひき形容詞」について見ていきます（「形容語」の使い方の詳しい分類です）

第１７講　止まれない「あとひき形容詞」というのもあります

本講では、「形容詞」というものの使い方（「運用」）を再認識していただきます
「形容詞」の大きな働きは、「名詞修飾」と「補役」でしたが、細かく見ると、もう少し分類できます
単に「形容詞」といっても一通りではないということです

簡単にいうと、「自動詞」と「他動詞」に分類したあと、「他動詞」の中にも「後続的他動詞（あとひき他動詞）」があるように、「形容詞」にも、単純な「形容詞」すなわち**「停止的形容詞（止まる形容詞）」**と展開的な「形容詞」すなわち止まらない**「後続的形容詞（あとひき形容詞）」**があるのです

「停止的形容詞（止まる形容詞）」とは、終息的な意味を持つ「形容詞」で、「形容詞」の「具体的状況内容」を説明する必要がないものです
これに対して、**「後続的形容詞（あとひき形容詞）」**とは、用いた**「形容詞」だけでは意味が終息せず、「形容詞」による「状態説明」の後に「具体的状況内容」を引き続き「（固有必須の）副詞系」で「状況説明」**しなければならないものです

たとえば、「背の高い少年」で終息しますが、「いっぱいの箱」といっても終息しません
聞き手・読み手は先を予測し「何モノで（いっぱいなのか）」期待しています
「お菓子で」「いっぱいの箱」と情報を完全に伝達する責務があるということです

また、形式的な観点からは、「形容詞の運用」は、**「名詞修飾」の「前置」「後置」**の２種類と、**「補役」**の場合と、そこに**「比較」**が組み合わさってくるのです
なお、「後置修飾」の場合は、「形容節詞（*関係代名詞*）＋ｂｅ動詞」が省略された、「簡略的な形容節」と考えられ、特別なものではありません

「形容詞」への視点と対処

Ⓐ、「停止的名修」なのか　→　①「前置」②「後置」があり、「中心名詞」に吸収され消滅する
Ⓑ、「停止的補役」なのか　→　③「構成要素」として活躍する
Ⓒ、「あとひき形容詞」なのか　→　④「あとひき後置名詞修飾」か⑤「あとひき補役」か
Ⓓ、「比較」しているか　→　⑥⑦⑧　（比較があるのは「形容詞」と「副詞」です）

「形容詞」の「後置（あとおき）」には十分注意してください（「形容節」が典型です）

Ⅰ　形容詞の運用（使用方法）の分類

Ⓐ「停止的形容詞」の「名詞修飾」

①「前置名詞修飾」

a pretty girl (in our class)

②「後置名詞修飾」・・・(「簡略形容節」)　→　緊密な「副句」を伴う

a girl (who is) pretty in our class

Ⓑ「停止的形容詞」の「補役」

③「単純補語」

The girl is pretty.

Ⓒ「後続的形容詞（「あとひき形容詞」）」

④「後続的後置名詞修飾（「あとひき後置名詞修飾」）」・・・(「簡略形容節」)

a box (which is) full of books

「固有必須の副句」を伴う

⑤「後続的形容補役（「あとひき形容補役」）」　→　「固有必須の副句」を伴う

The box is full of books.

She is sure of his success.

Ⓓ「比較形容詞」を伴う三つの場合

⑥「比較形前置名詞修飾」

ｔｈｅ　ｔａｌｌｅｓｔ　ｇｉｒｌ

⑦「比較形後置名詞修飾（「比較形あとひき後置名詞修飾」）」・・・（「簡略形容節」）
→　比較対象や範囲限定の「副句」

ｔｈｅ　ｇｉｒｌ　（ｗｈｏ　ｉｓ）（ｔｈｅ）　ｔａｌｌｅｓｔ　ｉｎ　ｏｕｒ　ｃｌａｓｓ
比較あとひき後置名修　「範囲限定」の「副句」

⑧「比較形補役（「比較形あとひき形容詞補語」）」　→　比較対象や範囲限定の「副句」

Ｔｈｅ　ｇｉｒｌ　ｉｓ　ｔａｌｌｅｒ　ｔｈａｎ　ｈｅｒ　ｍｏｔｈｅｒ.
比較あとひき形補　「比較」の対象を示す「副句」
「ｔｈａｎ」は「成句詞」

「形容詞」の運用のまとめ

形容詞の分類	前置名詞修飾	後置名詞修飾	補　役
停止的形容詞	①修飾の原則	②簡略形容節	③単純補語
後続的形容詞	——	④あとひき後置名修	⑤あとひき補語
比較形形容詞	⑥比較前置名修	⑦比較あとひき後置名修	⑧比較あとひき補語

Ⅱ　後続的形容詞（あとひき形容詞）の詳細

「後続的形容詞（あとひき形容詞）」とは、「名詞」の「状態」を「形容詞」だけで説明しきれるものではなく、「形容詞」の「具体的状況内容」を「固有必須の副詞系」でさらに説明しなければならない複雑高度な「形容詞」です

	「固有必須」の「副詞系」
「後続的形容詞（あとひき形容詞）」＋「・・・」	「成句詞＋後属役」（「副句」）
	「ｔｏ不定詞」副詞的用法
	ｔｈａｔ「副節」 例外的に、ｗｈ節・ｉｆ節、ｔｈａｎ節等

主な「あとひき形容詞」は限られていますから、確実に認識理解記憶してください
また、ひとつの「あとひき形容詞」でも、後続する「副詞系」の３種のいづれかによって、意味が多少異なることが多いので、そこにも注意して記憶してください

主な「あとひき形容詞の運用」のまとめ

「あとひき形容詞」 （名詞修飾の場合の意味）	あとひき形容詞の具体的状況を説明する固有必須の副詞系		
	副句（成句詞～）	ｔｏ不定詞	ｔｈａｔ副節
ａｆｒａｉｄ （――）	恐れている（of）	～するのに怖がっている （こわくて～できない）	―――
	心配している 気づかっている （ for ）（ of ） （about）	―――	～であることに心配である
ａｎｘｉｏｕｓ （――）	心配している 不安である （about）（of）	―――	―――
	切望している（for）	切望している （for 人 to do）	切望している
ｃｅｒｔａｉｎ ①ある ②ある程度 ③一定の	確信している （about）（of）	―――	確信している （ｗｈ節）（ｉｆ節）
	―――	確実である （間違いなく～する）	確実である It is certain that～
ｅａｇｅｒ 熱心な	熱望して （for）（about）	熱望して （しきりに～したがって）	熱望して
ｐｒｏｕｄ 誇れる、高慢な	誇りを持った（of）	誇りを持った	誇りを持った
ｓｕｒｅ 信頼できる、確かな	確信している （of）（about）	―――	確信している （ｗｈ節）（ｉｆ節）
	―――	確実である （きっと～する） （作文者が思っている）	―――
ｌｉｋｅｌｙ ①適切な ②もっともらしい	―――	ありうる （～しそうだ）	ありうる It is likely that～

辞書をひいて、それぞれ例文を引き写して、まとめのノートを作成してみてください

「比較形あとひき形容詞の運用」

もうひとつ重要な「あとひき形容詞」があります
それは、「比較」です（上記「Ⅰ⑥⑦⑧参照」）
「比較」というものは、「形容詞」と「副詞」にしか起こりません
（「比較」というものは、中学英語では簡単なものと鼻にも掛けない意識もされないものでありながら、高校英語で進展するうちに複雑になり手に負えないものになるものですが、「品詞分解」で「分析」的に考えていけば簡単に理解できます）

「ハナコはかわいい」で止まりますが、「ハナコはよりかわいい」と言った場合、止まっていいのでしょうか
「～より」すなわち「**比較の対象の提示義務**」がありますね（止まりませんね）
「ハナコは一番かわいい」も同様に、「どこで、どの範囲で、かわいいのか」という「**範囲を指定する義務**」が生じますね（例えば「私たちのクラスの中で」）
「比較級」「最上級」というのは、「あとひき形容詞」の拡張的な一種と思ってください
すなわち、**「ａｓ～」「ｔｈａｎ～」は、「比較」の具体的「対象」「内容」「範囲」等であって、「比較形形容詞」の状況内容を説明提示する「副句」「副節」**なんですね

「比較」は「副詞」にも生じますから、「比較あとひき副詞」というものもあるわけです（「比較」の詳細は、別巻《「第２６講」以降》で扱う予定です）

以上、「形容詞」の複雑さがわかったでしょうか
でも、本講のように、整理して認識していけば、なんのことはありません

「品詞」の視点からの「英文に対する考え方」はおおよそ終わりましたが、理解していただけたでしょうか

次講からは、また「動詞」の視点からみた「構成要素」「構造把握」の方に戻っていきます
ただ、「動詞」に関する詳細情報であって、基本情報ではないことに注意してください
あくまで、瑣末な後付けの知識事項なのです

では、「授与動詞」「拡術動詞」に、特別な「拡術動詞」の「使役動詞」と「知覚動詞」に、さらに「自動詞」の拡張形態である「補完動詞」と順次みていきましょう

第１８講　「人に何かを（して）あげる系の他動詞」の「授与動詞」

「動詞」について本来的な構造の学習するのは、第０３講以来です

それほど、「動詞」の５種類（５文型）に深入り（第４番目と５番目）する学習の前に理解しなければならない重要事項が多いのです（ある意味、深入りといえる「授与文型」「拡術文型」の学習は「構造把握」等の全体的視点からすれば瑣末ともいえるのではないでしょうか）（4・5番目に深入りする暇がるのなら、もっと他にやるべきことがあるのです）

「５文型」が本当に理解できるための前提条件が多いのです

では、そういう前提を前講までにある程度確立してきましたので、再び、「動詞」による『文。』の支配の詳細の続きについて見ていきましょう

「認識・意思・思想」を『文。』であらわす場合、①「主役」を提示し、②「動詞」を選択し、③その「動詞」による支配が必須とされる「名詞系」や「形容詞系」（や「副詞系」）を配置することで、その『文。』は完成します

動詞の支配実体の分類

「自動詞」には、「自立動詞」と「補完動詞」の２種類があり、「他動詞」には、「関渉動詞」と「授与動詞」と「拡術動詞」の３種類があります

それぞれ、「名詞」と「形容詞」に対する「支配のパターン」から、合計５種類に分類されているのです（いわゆる「５文型」です）

基本分類	詳細分類	基本構造	一般呼称
自動詞	自立動詞	自立	（*第Ⅰ文型*）
	補完動詞	補完　＋　補	（*第Ⅱ文型*）
他動詞	関渉動詞	関渉　＋　目	（*第Ⅲ文型*）
	授与動詞	授与　＋　人目　＋　物目	（*第Ⅳ文型*）
	拡術動詞	拡術　＋　目　＋　補	（*第Ⅴ文型*）

一般には、「自立動詞」を「*完全自動詞*」、「補完動詞」を「*不完全自動詞*」、「関渉動詞」を「*完全他動詞*」、「拡術動詞」を「*不完全他動詞*」と呼びますが、あまりに形式的な呼称で実体がわかりませんので、本書ではその作用や構造から命名しました

「完全」「不完全」「第～文型」・・・何の意味・効用があるのでしょうか

「授与動詞」とは

本講では、「名詞」を２つ支配する「授与動詞」について見ていきます

「授与動詞」とは、**「～（して）あげる」**をあらわす**「あげる系動詞」**群です
「与えてあげる」「教えてあげる」「見せてあげる」「話してあげる」「買ってあげる」「つくってあげる」などです
「授与動詞」は、**「（名詞）人目的」**と**「（名詞）物目的」**という**２つの「名詞目的役」を支配**して、**「人に物を（～して）あげる」**という「現事象」をあらわします

Ｓｈｅ	ｇａｖｅ	ｈｉｍ	ａ　ｂｏｏｋ	．
	授与動詞	人目的	物目的	

「授与動詞」に関する注意点としては、**「物目的」に「ｔｈａｔ名詞節」「wh名詞節」「ｉｆ名詞節」「ｗｈｅｔｈｅｒ名詞節」がなる**ことです

Ｈｅ　ｔｏｌｄ	ｍｅ	ｔｈａｔ　ｓｈｅ　ｗａｓ　ｓｉｃｋ	．	
	人目的	名節物目的		

Ｈｅ　ａｓｋｅｄ	ｍｅ	ｉｆ　ｓｈｅ　ｗａｓ　ｓｉｃｋ	．	
	人目的	名節物目的		

本書では、「授与動詞」の文型を**「授与文型」**と呼びますが（形式的に番号で呼んでも意味がないからです）、一般には「*第Ⅳ文型*」といわれています

「授与動詞」の特徴は、≪**「人目的」≠「物目的」**≫です（**「主述関係」はありません**）

では、「ｌｅａｖｅ」は、「関渉文型」「授与文型」「拡術文型」の３通りありますので、それぞれの文型の感覚を養うための参考にあげておきます

「ｌｅａｖｅの関渉文型」の例文

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　Ｔｏｋｙｏ．　（東京を去った）

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｈｉｓ　ｆａｍｉｌｙ．　（家族を置き去りにした）

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｈｉｓ　ｕｍｂｒｅｌｌａ．　（かさを置き忘れた）

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｈｉｓ　ｂｒｅａｋｆａｓｔ．　（朝食を残しておいた）

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｆｒｏｍ　Ｔｏｋｙｏ　ｆｏｒ　Ｓａｐｐｏｒｏ．
これは、ふたつの「副句」をともなった「自立文型」です

「ｌｅａｖｅの授与文型」の例文

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｈｉｓ　ｓｏｎ　ｍｕｃｈ　ｍｏｎｅｙ．（息子にを多くの金を残した）

→　Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｍｕｃｈ　ｍｏｎｅｙ　ｔｏ　ｈｉｓ　ｓｏｎ．

Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｍｅ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ．（私にその問題を任せた）

「ｌｅａｖｅの拡術文型」の例文は次講（第１９講）で示します

本講の最後に「授与動詞」の一般的な学習で重要なものとして強調されることを提示しますが、「構造把握」という観点からは、いかにも瑣末なことだということに注意してください

で、「授与文型」は、≪**「授与動詞」＋「物目的」＋「成句詞」＋「人目的」**≫と言い換えられますが、**「成句詞」は「ｔｏ」と「ｆｏｒ」の２種類**に分けられています

Ｓｈｅ　ｇａｖｅ　ａ　ｂｏｏｋ　ｔｏ　ｈｉｍ　．
関渉動詞　目的語　副句

Ｓｈｅ　ｂｏｕｇｈｔ　ａ　ｂｏｏｋ　ｆｏｒ　ｈｉｍ　．
関渉動詞　目的語　副句

「副句」が「ｔｏ」になる	ｇｉｖｅ、ｌｅｎｄ、ｐａｓｓ、ｐａｙ、ｓｅｎｄ、ｓｈｏｗ、ｔｅａｃｈ、ｔｅｌｌ、ｗｒｉｔｅ　など
「副句」が「ｆｏｒ」になる	ｂｕｙ、ｆｉｎｄ、ｇｅｔ、ｍａｋｅ　など

「ｂｒｉｎｇ」のように両方可能なものや、「ａｓｋ」のように両方不可なものもあります

次講では、５番目の「文型」である「拡術文型」について見ていきます

第１９講　ようやく登場、「拡術動詞」と申します

本講の課題である、「他動詞」の分類の最後は、「拡術動詞」です

「拡術動詞」とは、「目的役」と、『その「目的役」の具体的内容・状態を説明する「補役」』の２つの「文役」を支配する「他動詞」です

また、「拡術動詞」を使った『文。』を本書では**「拡術文型」**といいます

「目的役」と「補役」のあいだには、≪「主語」「述語」の関係（「主述関係」）≫があります（ここに「拡がる叙述」という「拡術動詞」の命名の由来があります）

拡術動詞　＋　**目的役（①）**　＋　**補役（②）**

例えば、動詞によって、「①を（が）②だと思う」、「①を（が）②だとわかる」「①を（が）②だと考える」、「①を②のままにする」等の意味があげられます

Ⓐ、　I　think　him　a　clever　man.
目的役　補役　名補句
「私は彼はかしこい男だと思う。」

Ⓑ、　I　found　him　clever.
目的役　補役　形容補語
「私は彼がかしこいとわかった。」

「目的役」と「補役」には主述関係があり、**≪「目的役」＝「補役」≫の関係**にあると説明されます

ですから、次のように、明確な「主述関係」をもつ「ｔｈａｔ名節」に書き換えられる場合もあります

I　think　**that　he　is**　a　clever　man.
「ｔｈａｔ名節」中の「名補句」

I　found　**that　he　was**　clever.
「ｔｈａｔ名節」中の「形容補語」

すべてが、「ｔｈａｔ名節」に書き換えられるわけではありませんが、書き換えられる場合があることから、「主述関係」にあるのが、よく理解できると思います

この「ｔｈａｔ名節」の中身は、明確な「主述関係」がある「補完文型」ですが、**「補完文型」の「補役」は、「主部」を説明するので「主格補役」**といわれます

「拡術文型」の場合は、「目的役」を説明するのですから「目的格補役」とよばれます

実態的には、「拡術文型」は「拡術動詞」のあとに、「補完文型」を抱え込んでいるということになります

また、「補完文型」でみたのと同様に、Ⓐの『文。』の「ｍａｎ」は「名補語」で、「ａ　ｃｌｅｖｅｒ　ｍａｎ」が「名補句」であり、Ⓑの『文。』の「ｃｌｅｖｅｒ」は「形容補語」となります（「形容補役」の認識は重要なので、以下に「形容詞系」の表を再掲します）

「補役」になる形容詞系のまとめ

形容詞系 「補役」になる	①形容語
	②不定詞の形容詞的用法
	③能動分詞（現在分詞）の形容詞的用法
	④受動分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑤完了分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑥形容句
	⑦形容詞化された副語

前講に引き続き、「ｌｅａｖｅ」の例文で、「文型」の完全理解をしてください

「ｌｅａｖｅ」の「目的格補役」は「形容詞系」のおおよそが「補役」になれますので、理解が深まるかと思います（例文の番号は、上の表の番号と一致します）

「ｌｅａｖｅの拡術文型」の例文　　（二重下線部が「目的格形容補役」です）

① Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｔｈｅ　ｄｏｏｒ　<u>ｏｐｅｎ</u>.
（ドアを開けたままにした）

② Ｈｅ　ｌｅｆｔ　ｔｈｅｍ　<u>ｔｏ　ｆｉｎｉｓｈ　ｔｈｅ　ｗｏｒｋ</u>.
（彼らにその仕事を終わらせるのを任せた）

③ He left them waiting.
（彼らを待たせておいた）

He left the machine runing.
（その機械を動かしたままにしておいた）

④⑤ He left his work undone .
（仕事をなさないままにしておいた）

⑥ He left her in charge (of the store).
（彼女にその店の管理を任せた）

He left her out of his team.
（彼女を彼のチームから排除しておいた）

He left her for dead.
（彼女を死んだ状態のものだと放置しておいた→死んだものとあきらめた）

⑦ He left the light on .
（電灯をつけたままにしておいた）

以上で、基本的な「文型」を全て見てきました
『文。』の「構造把握」という「考え方」がわかってきたでしょうか
「英語が苦手な方」は、絶対に「英文」を「感覚・フィーリング」や「単語の意味の追っかけ」で読んではいけません
ひたすら、「文法理論」を駆使して、すなわち**「品詞分解」「構造把握」をして、緻密に論理的に分析的に読むしか英文に対する苦手意識の打開策・克服法はない**のです

「英文法」は難しいと思っている方が多いでしょうが、実は、「英文法」は「誰でも英文が読めるようになるための」「簡便な」「理論的な」「手段」「道具」であることがもう得心できたでしょう（もちろん、従来の無体系・無理論・無秩序・羅列は理解に苦しむ難しいものでした）

次講では、特別な種類の「拡術動詞」について見ていきます
その前に、補足しておきます
以下の「補足　その２～４」は、はじめのうちは流すか飛ばすかしてください

「受動態の後ろに残るもの」　その２

第１６講の最後で学習した「受動態（受動分詞）の後ろに残るもの」という「問題点」に関して、「授与文型」と「拡術文型」の具体的な例文をあげておきます
はじめのうちは、これを意識することが大切です（特に「残るもの」が「名節」の場合などには注意が必要です→後述「その２」を参照してください）

（第１６講の「受動態の後ろに残るもの」から引き継いでいます）（二重下線部分が残存物です）

②「授与文型」（第２０講参照）の「元・人目的」もしくは「元・物目的」

Ｓｈｅ　ｇａｖｅ　ｈｉｍ　ｈｅｒ　ｂｏｋ．
「人目的」　「物目的」

「人目的」を「主部」とする場合

Ｈｅ　ｗａｓ　ｇｉｖｅｎ　**ｈｅｒ　ｂｏｋ**　ｂｙ　ｈｅｒ．

「物目的」を「主部」とする場合

Ｈｅｒ　ｂｏｋ　ｗａｓ　ｇｉｖｅｎ　**ｈｉｍ**　ｂｙ　ｈｅｒ．

③「拡術文型」（第２１講参照）の「元・名補役」や「元・形補役」

Ⓐ、Ｔｈｅｙ　ｆｏｕｎｄ　ｈｉｍ　ａ　ｃｌｅｖｅｒ　ｍａｎ．
目的役　名補役　㊟

Ｈｅ　ｗａｓ　ｆｏｕｎｄ　**ａ　ｃｌｅｖｅｒ　ｍａｎ**　ｂｙ　ｔｈｅｍ．

Ⓑ、Ｔｈｅｙ　ｆｏｕｎｄ　ｈｉｍ　ｃｌｅｖｅｒ．
目的役　形補役

Ｈｅ　ｗａｓ　ｆｏｕｎｄ　**ｃｌｅｖｅｒ**　ｂｙ　ｔｈｅｍ．

㊟≪いくら「名詞」であっても、「補役」を「主部」にして「受動態」に書き換えることはできないことに注意してください≫

さらに、補足させていただきます（はじめのうちは、流すか飛ばすかしてください）

「受動態の後ろに残るもの」　その３

「群動詞」といわれているものの「受動態」の処理にも注意が必要です
「群動詞」は≪複数語の集合体がひとつの他動詞として働くもの≫で、

①「他動詞」＋「目的役」＋「副語」
（「他動詞」＋「副語」＋「目的役」　→　「副詞」は位置の変更が可能）
②「他動詞」＋「固有の目的役」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役となる）」
③「自動詞」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役となる）」
④「自動詞」＋「副語」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役となる）」
の４種があります

「群他動詞」の『文。』を「受動態」にすると、「主部」になった「目的役」・「本来、後属役で目的役になったもの」以外の取り残された部分（二重下線部）が「浮いて見えたり」「違和感があったり」「意味不明に思えたり」するのです
これらが、「受動態」（「受動分詞」）の後ろにある「厄介な残存物」です

群他動詞４種の「受動態」

①「他動詞」＋「目的役」＋「副語」（「他動詞」＋「副語」＋「目的役」）の場合

S h e　t u r n e d　t h e　r a d i o　o f f.
目　副語

T h e　r a d i o　w a s　t u r n e d　o f f　b y　h e r.

②「他動詞」＋「固有の目的役」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役）」の場合

S h e　t a k e s　g r e a t　c a r e　o f　h e r　m o t h e r.
固有の目的句　成句詞　後属役（→目的役）

ふたつの「目的役」があり、ふたつの「受動態」があることに注意してください
H e r　m o t h e r　i s　t a k e n　g r e a t　c a r e　o f　b y　h e r.

G r e a t　c a r e　i s　t a k e n　o f　h e r　m o t h e r　b y　h e r.

③「自動詞」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役）」の場合　（「群他動詞」＋「目的役」）

They laughed at the boy.
自　成句詞　後属役（→目的役）

The boy was laughed at by them.

「laughed at」で、「他動詞」の働きをしていると見るのです
「群他動詞」という考え方の典型ともいえます

④「自動詞」＋「副語」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役）」の場合

They speak ill of the girl.
自　副語　成句詞　後属役（→目的役）

The girl is spoken ill of by them.

以上、確実に、「能動態⇔受動態」の「往復」ができるようになってください

「受動態の後ろに残るもの」　その４

「授与文型」の「物目的」が「名節」の場合

He told me that she was sick .
人目的　名節物目的

「人目的」を「主部」とする場合

I was told that she was sick by him.

「名節物目的」を「主部」とする場合は、次の項目を参照してください

「　Ｉｔ　ｉｓ　ｓａｉｄ　ｔｈａｔ　～　」の「実体」

ここで、「　Ｉｔ　ｉｓ　ｓａｉｄ　ｔｈａｔ　～　」が「熟語」だと思っていることが負けのはじまりという点について、見ておきましょう

Ｔｈｅｙ　ｓａｙｓ　ｔｈａｔ　ｓｈｅ　ｉｓ　ａ　ｇｅｎｉｕｓ　.

「ｔｈａｔ名目的節」を「主役」にします

Ｔｈａｔ　ｓｈｅ　ｉｓ　ａ　ｇｅｎｉｕｓ　ｉｓ　ｓａｉｄ　ｂｙ　ｔｈｅｍ.

「ｔｈａｔ名主（役）節」を「仮主語Ｉｔ」に置き換え、「ｂｙ　ｔｈｅｍ」を省略します

Ｉｔ　ｉｓ　ｓａｉｄ　ｔｈａｔ　ｓｈｅ　ｉｓ　ａ　ｇｅｎｉｕｓ.

というだけのことです
「熟語」でも何でもありませんね
本来的な「熟語」の範囲・定義は、「慣用的に言い慣わされている表現で、文法的説明がほぼ不可能なもの」という具合で、はじめのうちは学習すべきでしょう

なんでもかんでも「熟語」として「まる暗記」することはやめましょう
「品詞分解」「構造分析」「構造把握」で読む技術を身につけてください

特に、「受動態」の場合、元の『文。』を復元しながら、**「受動分詞」の後にある「残存物」の「存在根拠」**を考えてください（**単純・純粋な「副詞」との峻別**に要注意）
単なる「副詞」なのか、**「元人目的」「元物目的」「元補役」「群他動詞の構成語」「あとひき他動詞の後の固有必須の副句」などに注意しながら「構造把握」**をして、「受動態」の『文。』を読むようにしてください

『「受動態」の『文。』を見たら、元の『文。』を復元し、回帰せよ！』

「拡術動詞」も「受動態」も、ご納得いただけたと思います
それでは、次講では、特殊な「拡術動詞」である、「使役動詞」と「知覚動詞」と言われているものを整理してみましょう

第２０講　特殊な「拡術動詞」・・・「使知動詞」

本講では、「拡術動詞」のうち、特別なものを見ます
Ⅰ**「使役動詞」**と呼ばれるものと、Ⅱ**「知覚動詞」**といわれているものです
両者あわせて、ここでは仮に**「使知動詞」と命名**しておきます

Ⅰ　「使役動詞」

「使役動詞」とは、**≪「人に～させる」という意味が基本の特別な「拡術動詞」≫**です

主な**「使役動詞」**には、**「ｈａｖｅ」「ｍａｋｅ」「ｌｅｔ」という「三代表」**に加えて**「ｇｅｔ」**があげられます

「ｈａｖｅ→もつ」「ｍａｋｅ→つくる」「ｇｅｔ→得る」という次元からの脱却です

「使役動詞」は、「拡術動詞」の一種ですから、
「目的役」と「補役」を従え、そのあいだには、「主述関係」があります

使役動詞　＋　目的役（①）　＋　補役（②）

主要な意味は、**「①（主に「人」）に②をさせる」**です

ひとことで「～させる」といっても、
「ｈａｖｅ」は「汎用的」、「ｍａｋｅ」は「強制的」、「ｌｅｔ」は「許可・容認的」で、「ｇｅｔ」は「一般的・説得的」といわれますが、このような細かな分類に固執するのは相当高いレベルに到達するまでは避けるのが得策で、ここでは、抽象的な分類よりも、構造に意識的になじむこと（例文の精査・検討）が重要と考えます

≪「①」に「②」させる≫ということは、
「①」は「人的要素」の場合が多く、
「②」は「名詞系補役」も「形容詞系補役」も可能です

この場合の「名詞系補役」になるのは「名語句」しかありませんが、「形容詞系補役」は様々ありますので、以下にまとめを再々掲しておきます

「補役」になる形容詞系のまとめ

形容詞系 「補役」になる	①形容語
	②不定詞の形容詞的用法
	③能動分詞（現在分詞）の形容詞的用法
	④受動分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑤完了分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑥形容句
	⑦形容詞化された副語

わざわざ「使役動詞」が強調される従来からの空虚な動機や理由としては、「形容詞系補役」のひとつである「不定詞の形容詞的用法」の場合、「ｔｏ」がない、原形のままの「原形不定詞」とよばれるものが使用されることにあるようですが（実は瑣末な現象一端に過ぎない）、それ以上に、「形容詞系」全体が「補役」になれることを認識して、「拡術動詞」全般の「目的役と補役の主述関係」をおさえることが重要です

「ｈａｖｅ」「ｍａｋｅ」「ｌｅｔ」に「ｇｅｔ」の各「使役動詞」において、「形容詞系」①～⑦の全てが使用可能というわけではありません

さらに、「⑧名補役」を含めて、可能な「補役」を表にまとめますと、次のようになります（初めのうちは、無理に全部覚えようとするのではなく、×印に留意する程度にしてください）

「補役」候補		ｈａｖｅ	ｍａｋｅ	ｌｅｔ	ｇｅｔ
形容詞系補役	①形容語	○	○	○	○
	②不定詞	原形不定詞	原形不定詞	原形不定詞	ｔｏ不定詞
	③能動分詞	○	×	×	○
	④受動分詞	○	○	×	○
	⑤完了分詞	—	—	—	○
	⑥形容句	○	—	○	○
	⑦形容詞化副語	○	—	○	○
⑧名補役		○	○	×	×

「—」は、意味的に必要ないか、「辞書」中に使用例が見当たらないことを示しています

以下、例文をあげます

「＿＿＿」（一重線）は「目的役」で、「＿＿＿」（二重線）は「補役」です

「辞書」で丹念に調べ上げてください（表の数字と例文の数字は一致しています）

「ｈａｖｅ」の例文

強制的な意味はなく、「そのような状態に持っていく段取り」に視点があり、「～させておく」「～してもらう」「～される」等の「意訳」がなされますが、意訳や抽象的な分類よりも、「補役の形態」や、「目的役」と「補役」の「主述関係（能動か受動か等）」を確認しながら、例文の実質的意味を考えてください（以下の「使役動詞」も同様）

① Ｙｏｕ ｍｕｓｔ ｈａｖｅ ｙｏｕｒ ｃａｒ ｃｌｅａｎ.
（車をきれいにさせなければならない）

② Ｙｏｕ ｓｈｏｕｌｄ ｈａｖｅ ｙｏｕｒ ｓｏｎ ｃｕｔ ｈｉｓ ｈａｉｒ.
（息子に息子自身の髪を切らせるべきだ）

Ｙｏｕ ｓｈｏｕｌｄ ｈａｖｅ ａ ｂａｒｂｅｒ ｃｕｔ ｙｏｕｒ ｈａｉｒ.
（床屋にあなた自身の髪を切らせるべきだ→切ってもらうべきだ）

③ Ｔａｒｏ ｃｏｕｌｄｎ’ｔ ｈａｖｅ ｔｈｅｍ ｓｌｅｅｐｉｎｇ.
（彼らを寝かせておくことができなかった）

④ Ｙｏｕ ｈａｖｅ ｔｏ ｈａｖｅ ｙｏｕｒ ｈａｉｒ ｃｕｔ.
（あなたの髪を切ってもらわなければならない）

⑥ Ｓｈｅ ｈａｄ ｈｅｒ ｆｏｏｔ ｉｎ ｔｈｅ ｍｕｄ.
（足を泥の中に入れさせてしまった）

⑦ Ｔｈｅｙ ｈａｄ ｔｈｅ ｇｕｅｓｔ ｏｕｔ.
（その客を外に出した）

⑧ Ｉ ｗｉｌｌ ｈａｖｅ ｙｏｕ ａ ｄｏｃｔｏｒ.
（あなたを医師にさせるつもりだ）

「ｍａｋｅ」の例文

「強制的」な意味をもち、「無理に～させる」ような訳になります

① They made her sleepy.
（彼女を眠くさせた）

② She made him be quiet.
（彼を静かにさせた）

She made him go home.
（彼を家に帰した）

「原形不定詞」の『文。』を「受動態」にすると、「不定詞」が「原形」でいる理由がなくなり、「ｔｏ不定詞」（の「副詞的用法」）に戻ります
（「ｍａｄｅ」という「受動分詞形容補語」の具体的状況説明の「副詞的用法」）
→ He was made to go home by her.

④ He made himself understood in Japanese.
（自分自身を日本語で（他人に）理解させた）

⑧ They made him captain.
（彼をキャプテンにした）

「ｌｅｔ」の例文

「自由に～させておく」という「自由意志の尊重」の意味合いがあります

① I want to let the bird loose.
（その鳥を自由にさせることを望んでいる）　（発音注意！）

② They let Taro go abroad.
（タローを海外に行かせた）

⑥ She let us out of her house.
（私たちを彼女の家から外に出してくれた）

⑦ He let me through.
（私を通してくれた）

「ｇｅｔ」の例文

広範一般的な使役をあらわしますので、「一を～にする」「一を～させる」「一を～してもらう」「一を～するように説得する」等、状況に応じた訳となります

① We got the room clean.
（部屋をきれいにした）

② She got her children to wash their shoes.
（子供たちに自分たちの靴を洗わせた）　注意！「補役」は「ｔｏ不定詞」

③ He got his machine running.
（機械を始動させた）

④ I got my homework finished.
（宿題を終わらせた）

⑤ They got Hanako gone.
（ハナコを追いやった）

⑥ She got her children to bed.
（子供たちをベッドに行かせた）

⑦ He got her book back.
（彼女の本を戻した）

「不定詞の形容詞的用法補役」は、「原形不定詞」ではなく、「ｔｏ不定詞」です

Ⅱ　「知覚動詞」

「知覚動詞」は、**人間の五感に関する「動詞」**です

「知覚動詞」も「拡術動詞」の一種ですが、「使役動詞」と同様に、「形容詞系補役」のひとつに過ぎない「不定詞の形容詞的用法」の場合に「ｔｏ」がない「原形不定詞」が使われるという特徴が過度に強調されております（これも、「構造把握」の観点からは瑣末な問題です）

「使役動詞」と同様、「目的役と補役の主述関係」を確認することが重要です

主な「知覚動詞」には、「ｓｅｅ」「ｈｅａｒ」「ｗａｔｃｈ」「ｆｅｅｌ」「ｎｏｔｉｃｅ」等があります

以下に、代表として「ｓｅｅ」の例文をあげます
「＿＿＿」（一重線）は「目的役」で、「＿＿＿」（二重線）は「補役」です

「目的役」の動作を「補役」であらわし（そこには「主述関係」がある）、その関係を「知覚動詞」が支配しているという「構造」を認識してください

「原形」が「最初から最後までの動作」を示し、**「能動分詞」が「一部的動作」**を示すといわれています

「ｓｅｅ」の例文

② We saw him **close** the door.
（彼がドアを閉める様子を終始見ていた）

③ We saw him **closing** the door.
（彼がドアをしめているところを一部ちらっと見た）

④ We saw the door **closed** by him.
（ドアが彼によって閉められるのを見た）

② → He was seen to close the door by us.
「知覚動詞」の『文。』を「受動態」に書き換えると、「不定詞」が「原形」であることの理由がなくなり、「ｔｏ不定詞」（の「副詞的用法」）に戻ります
（「ｓｅｅｎ」という「受動分詞形容補語」の具体的状況説明の「副詞的用法」）

③ → He was seen closing the door by us.
「能動分詞形容詞」が「補役」の場合を「受動態」に変えても、形のうえでは変化はありませんが、「ｓｅｅｎ」の具体的状況内容を説明する「副詞的用法」になったと考えられます

「他動詞」の「詳細な分類」が終わったところで、次講では、「自動詞」のうちの、特別な「補完動詞」をみてみましょう（・・・「推量」という広範な概念の最初の認識ですね）

第２１講　「避断定的補完動詞」でも「勝手な推量」や「外形的判断」ができます

一般に、**「動詞」をそのまま使えば、「断定」**や**「習慣」「真理」**をあらわします（このことは、「推量表現」の認識・理解のためには必要な前提理解です）

そして、『文。』は人間がつくるもので、どんなに客観的に描写したつもりでいてもその内容には**主観的なものは避けることができない**どころか、主観そのものであるのが現実です（人間は主観的存在であるがゆえに、「偏見」や「勝手な推量」で作文します）

そこで、「作文者」が「主観性」を素直に認めて、**「断定」を避けて（責任回避）、「断言できない」「推量」「想像」「遠慮がち」等の思惑を持ち込む場合の手段**が**「助動詞」**や、本講のテーマである**「避断定的補完動詞（断定回避的補完動詞）」**なのです

本講と次講で考えたいのは、
①**「助動詞」の実質的な働き**は、**「避断定（断定回避）」「責任回避」「推量」**で、
②「助動詞」ではなく**「動詞」そのものなのに、「助動詞」のような「避断定」の意味を内包**している**「避断定的補完動詞」**という「自動詞」があるということです

「避断定」とういうのは、**「断定できないもしくはしない場合」の総称**で、「推量」「想像」「非確信」「不確実」「未定」「未確認」「未来」「予定」等、様々な要素・意味内容を含んでいます（詳細は第２４講参照）

本来、「助動詞」を学習してから、「避断定的補完動詞」について学習するべきかもしれませんが、「動詞」全体についての学習が一通り終わったあとに、「助動詞」と「仮定法（とかいっているやつ）」を一体的に学習すべきものと考えますので、先に、本講で「避断定的補完動詞」を学習し、次講で「助動詞」を学習することにします

ちなみに、「避断定的補完動詞」の要素を持つ「ｈａｖｅ　ｔｏ」「ｗａｎｔ　ｔｏ」「ｌｉｋｅ　ｔｏ」「ｃｏｍｅ　ｔｏ」「ｇｅｔ　ｔｏ」「ｓｅｅｍ　ｔｏ」「ａｐｐｅａｒ　ｔｏ」「ｈａｐｐｅｎ　ｔｏ」等は、実質的には、「助動詞」的な役割を担っていると考えられます

では、本論に入ります

おおよそ、**実際に見ているか否かを問わず「避断定」的に表現したい場合は「助動詞」**を使い、**実際に見た上での外見的判断を表現する場合には「避断定的補完動詞」**を使います（「古文」の「視界外推量（らむ）」「眼前推量（めり）」が参考になりますので、「古語辞書」参照）

「避断定的補完動詞」の理解

<table>
<tr><th>主語</th><th>避断定的補完動詞</th><th>補語</th></tr>
<tr><td rowspan="3">Ｈｅ</td><td rowspan="2">ｌｏｏｋｓ
（～に見える）

ｓｅｅｍｓ
（～のように思われる）

ａｐｐｅａｒｓ
（～のように見える）</td><td>ａ　ｄｏｃｔｏｒ．

「名補役」
（事実的）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ｈａｐｐｙ．

「形容補役」
（評価的）</td></tr>
<tr><td>（ｉｓ）
（断定）</td></tr>
</table>

「ｆｅｅｌ」「ｓｏｕｎｄ」も辞書で確認してみてください

「彼は医師のように見える（思われる）。」「彼は幸せのように見える（思われる）。」というような訳になります（**「外見的判断」**というのがわかりますか）

次講で詳しく学習しますが、次の「助動詞」を使った例文と比べてみてください

「避断定的補完動詞」の「外見的判断」とは違いますね

（「助動詞」では、「外見的判断」とは異なる視界外の推定も含みますね）

Ｈｅ　ｍａｙ　ｂｅ　ａ　ｄｏｃｔｏｒ．　（彼は医師かもしれない。）

Ｈｅ　ｍｕｓｔ　ｂｅ　ｈａｐｐｙ．　（彼は幸せに違いない。）

「避断定的補完動詞」は「特殊な補完動詞」であるということを確実に理解・認識してください（「形補」「名補」を確実に認識しておさえてください）

次講では、ようやく、「形容節」の検証に入ります

参考として、『「事実」や「評価」の提示』と『「名詞」と「形容詞」の使われ方』の関係について考察しておきます

事実提示（→名主目補）と評価提示（→形修補）

人が他の人や社会に表明したい内容として、
まずは、
①**事実伝達（客観的事項）**と、②事実を前提とした**評価的判断（主観的事項）**があり
（**「事実伝達」**は主に**「名詞系」の「主語」や「目的役」「補役」**で表現されます）

②評価的判断には、（**「評価的判断」**は主に**「形容詞系」の「名詞修飾」「補役」**で表現されます）
Ⓐ社会一般で認められている**通常人の評価的判断**（主観の多数共通集合体・**社会評価**・共通認識・**社会常識**）とⒷ**個人的な評価的判断**（一般人の共感を得ていない）があり

Ⓑ個人的な評価的判断には、
㋐**将来的には社会常識**（将来には一般人の共通認識）になると考えられる評価（**先見常識**）
と、㋑**未来永劫社会常識とはなりえない**と考えられる評価とがあります（**永劫独善**）

以上のような分類が可能かと考えます

総体的には、**「事実伝達」では、「名詞」の「主役」「目的役」「補役」**が中心となり、
「評価的判断」では、「形容詞補役」「形容詞による名語修飾」が中心となるのです
特に、**「名詞系補役」**による「主役の言い換え」が難解な場合があるので要注意です
このような分類を意識して「現代文」「古文」「漢文」「英語長文」等に対処すると、
認識力や理解力や読解力に格段の差が生じてくると思います

主に、「事実提示」は「名詞補役」であり、「評価提示」は「形容詞補役」であるのが原則でありますが、事実提示が「形容詞」でおこなわれたり「評価提示」が「名詞」でおこなわれたりしたとしても、それぞれ原則的な性質を失ってはおりません（修辞による「品詞の代用」と考えられます）

<table>
<tr><td colspan="3">①事実伝達
（客観的事項）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②評価判断
（主観的事項）</td><td colspan="2">Ⓐ社会常識的価値判断</td></tr>
<tr><td>Ⓑ個人的評価的判断</td><td>㋐先見常識
㋑永劫独善</td></tr>
</table>